

# 湖南省の図書館に関する提案書

湖南省図書館協議会委員 OB・有志の会

湖南省の図書館はこれまで2館で運営されてきました。しかし将来の人口減少と施設維持管理の負担増等から「石部図書館は閉館」の方向性が示されることとなりました。そこで湖南省図書館協議会委員OB・有志の会（以下、「当会」と表記）は、社会教育としての図書館を考える場を設けることにしました。2024年7月から2025年9月まで計6回、市民の方々と一緒に学び、話し合いを重ねました。

令和8年度から西庁舎周辺整備の議論が始まります。当会ではのべ190名の方から頂いたご意見をもとに、これまでの学びを踏まえて、現時点で最適と考える案をまとめました。2025年11月末には、グループワークでの各報告と併せて、湖南省教育長様へ提案書としてお届けさせて頂くことができました。

下記はその提案内容をまとめたものです。湖南省の生涯学習・社会教育としての図書館が今後ますます発展することを願っています。

## 提案

湖南省の図書館には、未来を担う世代を育成する役割が一層求められている。子どもの読書活動推進を地域に広め、子どもと市民をつなぐ拠点と、「子どもまんなか社会」<sup>\*1</sup>づくりを目指す施策を展開する場も必要である。未来を担う世代を育成する機能を一層充実させた図書館を、湖南省立図書館の分館<sup>\*2</sup>として、甲西図書館とは別に設ける。

この分館は、あらゆる年代の利用者が触れ合い交流できる滞在型の場で、お互いの存在や会話が受容され、皆がフラット（平等）に居られる居場所とする。

※1 「子どもまんなか社会」とは、全ての子どもや若者が健やかに成長でき、将来にわたって幸せに生活できる社会のこと。「子ども」とは、心身の発達の過程にある者をいう。（子ども家庭庁より）

※2 「分館」とは、図書館法の第1章総則第3条「図書館は、図書館奉仕のため、土地の事情及び一般公衆の希望に沿い、さらに学校教育を援助し、及び家庭教育の向上に資することとなるように留意し、おおむね次にあげる事項の実施に努めなければならない。」として第5項「分館、閲覧所、配本所等を設置し、及び自動車文庫、貸出文庫の巡回を行うこと。」と記されている。

## ポイント

上記の提案は、以下の5点をポイントと考えています。

### ① 図書館法に則った分館であること

当会に参加された全ての方が、図書館は「資料や情報を容易に入手できる仕組みとして大事だ」、「図書機能」<sup>\*3</sup>ではなく「図書館が欲しい」と考えていました。つまり図書館法に則り、湖南省立図書館の組織の中に位置づけられ、その図書館システムの一環として運営・機能する図書館です。資料は希望者に確かに届き、確実性・継続性が保障されることになります。

また「居場所」を求める意見も数多くありました。併せてお互いの存在や会話が受容されるなど、敷居を低くして利用のすそ野を拡げた図書館も望まれていました。

甲西図書館はリニューアルが予定されています。しかし敷地面積が限られており、また、湖南省の人口は増えることが分かっています。面積が限られた中では「静かなエリア」と「会話のエリア」のゾーン分けは難しく、館内が混むと居心地に影響します。そこで、分館で対応することが適当だと考えました。

甲西図書館は本館として、図書館機能を十分に果たす「オーソドックスで静かな」図書館とし、分館を「会話などが受容される、賑やかな滞在型」図書館とします。

※3 「図書機能」とは、例えば「読書環境」などを図書機能と呼ぶことから、図書館や図書館職員が関わらなくても成立するもの。

「図書館機能」とは、図書館が提供するサービスやシステム。図書館職員が関わって直接サービスをすること。(湖南省の整理より)

### ② 行政が直営し、司書業務に精通した職員が実際の業務を行うこと

図書館は生涯学習の要の場です。当然ながら分館も高い倫理観を持ち、市民に対して公平・中立、市全体の奉仕を行う行政の直営であること、また、湖南省の図書館全体に責任を持つ湖南省立図書館館長のもとで運営されることが必要です。

また、社会教育やまちづくりには、市民を受け入れ応援し、人と人をつなぐ役割を果たす司書業務に精通した職員（本と人を結び付ける専門性を持った職員、いわゆる司書）の存在は不可欠です。

市民が図書館の運営・業務を担うケースは、自治の一つではありますが、市民の間で立ち位置に差異が生じ、フラットではなくなります。様々な事情をお持ちの方々が安心して居られる場所であるためにも、これまで通りの運営が望ましい在り様だと考えます。なお、このことは市民のお手伝い（ボランティア）を妨げるものではありません。

### ③ 全ての市民に、子どもの読書活動推進を働きかけること

図書館は、市民誰もが利用できる施設です。本を読むことの楽しさ・知る事の面白さは暮らしを豊かにします。しかし、湖南省の人口1人当たりの年間貸出冊数は低下傾向にあり、家庭の中で本を読む雰囲気は低下していると思われます。子どもの読書活動は、学校図書館においては素晴らしい

い成果をあげていますが、家庭での読書時間は少なく、主体的な読書活動にまでは育っていません。

社会が大きく変わりつつある今、自分で考え自分で決める力を培うことはますます重要になっています。市民が知りたい情報を得て、調べ選択することは暮らしを変えていきます。家庭や地域の読書への意識を高め、子どもの読書活動を支える施策が必要です。

そのためには、一人でも多くの市民が気兼ねすることなく分館を使えるよう、敷居を低くするという視点をとり入れた運営が望まれます。また、他市の図書館の見学からも、これまでのサービスに加えて、未来を担う世代へのサービスを一層充実させることが重要課題だと分かりました。

敷居を低くした分館は、幅広い利用を期待できることから、子どもと市民をつなぐ拠点になります。「子どもまんなか社会」づくりの理念に沿って、子どもを「主体としての市民」と位置づけて運営することが大きな鍵になると思われます。

#### ④ 子育て支援などの機能も盛り込むこと

相談事業では様々な形の場を設け、利用者の選択肢を広げることが大切だと言われています。この分館には子育て中の方も気兼ねなく足を運ぶことができるので、子育て支援をサポートするスペースなどを設けると、身近な場で気軽に行政とつながることができます。このように課を超えた取組は、「子どもまんなか社会」の理念の目に見える形として、市民の意識を涵養します。

#### ⑤ この分館については、それぞれの分野の専門家による検討委員会を設置し、東庁舎周辺整備並びに西庁舎周辺整備の中で検討すること

検討委員会では湖南市の総合計画を踏まえつつ議論を重ね、子どもも含めた市民を巻き込みながら意見を幅広く取り入れ、湖南市としての分館の設置（もしくは分館を含めた複合施設の建設）計画を推進するように希望します。

なお、図書館はある程度の広さ（蔵書数）が無いと機能しないと言われています。石部地域に予定される小規模多機能自治センターなど、面積が限られた構想の中ではその効果が期待できないと思われます。

## 湖南省の現状と課題

- ① 読書の重要性が一層増す中、読書活動の推進を政府各省庁が取り上げており、特に子どもの読書活動推進は喫緊の課題です。しかし湖南市の現状は、人口一人当たりの貸出冊数は減少傾向、湖南市の中小学生の家庭での読書時間は全国平均よりも短くなっています。
- ② 原因の1つは、家庭の中に読書をする雰囲気が少ないとこと、また、他市と比べて湖南市の図書館は、未来を担う世代へのサービスが手薄で改善の余地がある点だと思われます。
- ③ そこで課題を、家庭や地域へ呼びかけて読書への意識を高めること、そのためにまずは様々な観点から図書館のハードルを低くし、誰もが何度も足を運びたくなるよう利用のすそ野を広げる運営を行う

こと、とします。

- ④ ただし甲西図書館は敷地面積が限られ、湖南市の人口は増加することが分かっています。2館が1館になれば混むことが予想され、「静か」と「賑やか」のゾーン分けも難しいと思われます。

## 分館の設置で期待される効果

- ① 分館は「図書館機能」を有し、図書館法にもとづく施設となります。図書館長の責任のもとに、図書館システムの一つとして運営されるので、確実性や継続性が保障されます。
- ② 広さが確保された分館は、賑やかさが受容されます。特にこどもたちは会話などを気兼ねすることなく活動ができます。甲西図書館は、従来の静かな図書館を好む方たちのニーズに応えることができます。
- ③ 敷居を低くした分館は、気軽に来館し交流できる場となります。より多くの方に行政施策や読書活動推進を呼びかけることができるので、まちづくりを効果的に進めることができます。
- ④ 分館では学校図書館を超える蔵書から、こどもたちは知識の全体像を見るすることができます。本の世界の奥深さ、様々な知見・価値観と遭遇します。これはデジタルにはない体験です。様々な本との出会いから、主体的な読書活動が育ちます。
- ⑤ 分館が現在の石部図書館の位置に設置されれば、障がいをお持ちの方をはじめ石部図書館を現在利用されている方は、引き続き分館を利用できます。

## 参加者の声 「湖南市の社会教育としての図書館を考える集い」のグループワークより

当会が開催した全6回の集いでは、講師さんのお話の後、毎回参加者がグループに分かれて話し合い、その内容をグループごとに発表して頂く形をとりました。その内容を「図書館は必要」、または「不要」をキーワードに分析すると、全てが「図書館は必要（湖南市が整理して言うところの「図書機能」は望まない）」という考えに基づいた意見でした。

立地の場所については「石部」、または「小規模多機能自治基本構想を受けて石部も含めた4か所、もしくはもっと身近なところ」をキーワードに分類すると、「石部」をイメージした意見が多数でした。その要因は、石部文化総合センターが複合施設として長年利用され、人々の拠り所になっている点にあると思われます。

「小規模多機能自治センター4か所、もしくはもっと身近なところ」という意見は、平成19年湖南市立図書館協議会による答申に、「中学校区に1つ（計4か所）図書館があるのが理想だ」と記されている内容と同じであり、未だに実現していない案です。グループワークで毎回話題にあがっていましたが、三雲、下田、菩提寺の3か所にはまちづくりセンター、もしくはそれに準ずる施設がすでにあることを

踏まえると、それぞれの地域の中で議論が必要ではないかと考えます。

図書館のあり方としては、「居場所としての図書館」、「司書がいる図書館」、「子どもの育ちに寄与する図書館」が常に話題にあがっており、参加された多くの方はこの3点を強く望んでいました。

#### 【付記】

図書館の理想のあり方は「歩いて行ける身近な図書館」ですが、この実現には様々な課題や問題があります。ただし、市内小・中学校の図書館を整備して市民に開放する案は、比較的実現の可能性が高いと考えられるので、参考までに付記します。

以上